

## 20221113 (土) 上田仮説サークル資料

(井藤伸比古さんの研究資料『仮説実験授業 1963 年』ガリ本より西村寿雄先生あとがき紹介、2022 年 11 月の仮説実験授業研究会ニュースより多久和さん渡邊さん加藤さん主催の平林浩さんの会⑤紹介、『子どもの変革と仮説実験授業』より西川浩司さんの仮説との巡り会いの記述紹介、インド映画『スーパー 30 ～アーナンド先生の教室～』を上田映劇で見たこと、等)

滋野小 田中浩寿

今回も、資料の紹介ばかりのレポートで、すみません。

先月、井藤伸比古さんの研究資料『仮説実験授業 1963 年』ガリ本を注文したのが、ニュースなどと一緒に送られてきました。その中の、西村寿雄先生のあとがきがとても印象的だったので紹介します。(資料 1)

特に、西村先生が仮説実験授業に巡り会う数年前から、当時名古屋大の上田薫氏(故人、社会科の初志を貫く会名誉会長)の考え＝「知識をただ子どもに与えるだけではなく、子どもの生活実態を交えて知識を習得させていく授業」に傾倒していた。これは、子どもの経験を大事にしながら、知識の系統を大切にしていこうという矛盾した考えで、ある意味「経験主義」と「系統主義」が拮抗した考え方であった。と書かれているところが目に留まったからであります。信州教育界では、もう上田薫先生の教育思想は徐々に忘れ去られてきていますが、上田先生の本『知られざる教育』『人間形成の論理』『ずれによる創造』『絶対からの自由』といった主著を、若いころ私も読んだからです。しかし現実の授業は、なかなか子ども主体の授業とはなりません。そして自分の教育的力量や子ども理解が不十分であると、理想と現実とのギャップに反省ばかりしていました。こうした中、数教協や仮説実験授業に出会い、実践の拠り所としても興味関心が現在まで続いていると言えます。

ところで、仮説実験授業初期の実践者(第一世代と言える方々)は、仮説実験授業の前に、例えば平林浩先生や西川浩司先生(故人)は、日本生活教育連盟(日生連＝梅根悟氏が中心的存在)に所属し、生活教育や問題解決学習の実践を経て、仮説と巡り会い、傾倒していかれた模様です。

2022 年 11 月の仮説実験授業研究会ニュースに、多久和さん・渡邊さん・加藤さん主催の平林浩さんの会⑤についての記事がありますが、仮説草創期の生き証人である、平林先生に学ぶ会を継続して行っていることは貴重ですね。(資料 2)

また、『子どもの変革と仮説実験授業』という古い本をたまたま見たら、西川浩司先生の仮説実験授業との巡り会いについて書かれていたところを見つけたので、紹介します。(資料 3)

こういった資料は、『仮説実験授業とめぐりあった頃』のガリ本や、他の著書にも書かれていると思いますが、それらを整理して一覧にしたような資料があればいいな、と思いつつ、自分としては、その時に見つけたものを脈絡なく紹介しているだけなので、研究としてはまったく不十分で引用ばかりですが、紹介します。

これらの資料から考えたことは、仮説実験授業草創期の先生方は、「仮説に巡り会う以前には、子ども主体の授業を創り出そうと教育実践に取り組んでいたんだ、という共通する事実がありそうだ、ということです。

以前から思っていた「仮説実験授業は、問題解決学習と系統学習の両者を見ごとに体現した授業である」ということに関する、具体例をさらに見い出したいと考えます。

### 【別的话题】(チラシを添付してます)

インド映画『スーパー 30 ～アーナンド先生の教室～』を、上田映劇というローカルな映画館で、11 月 3 日に見ました。この映画は、インドのアーナンド・クマールさんが私塾「スーパー 30」を開き、極貧にあえぐ家庭から優秀な子ども 30 人を選抜して、無償で食事と寮と教育を与え、インド最高峰の IIT (インド工科大学) に 30 人全員合格させるという快挙を成し遂げた実話をもとにした映画です。階級差別がまだインドではある模様です。そんな中「王の子どもは王じゃない。王になるのは能力ある者だ」を体現したことはすごいことです。その道のりは決して順風満帆でなく、幾多の困難や誹謗中傷を乗り越えてきたことが映画から感じ取れました。そして教師としての子どもたちへの向き合い方を考えさせられました。また、社会福祉の視点からして、生活困窮者支援や児童福祉のソーシャルワーク実践としての価値も高いと言えます。

上田映劇はいわゆるミニシアターで、東宝などのメジャーではないけれども、なかなか良質な映画を見せてくれます。こうした映画館が上田にあることはありがたいです。シニアになると、一般 1900 円のところ 1200 円で見られるのでお得です。上田にはアリオに、TOHO シネマズ上田もあり、こちらでも見えます。【以上】

資料1-①

研究資料  
『仮説実験授業』  
1963年(井筒俊石編)

●1963年の夏を忘れない

「あとがき」によせて 西村寿雄

私は、1963年8月7-9日「仮説・実験授業提唱」の場にいた。  
ただ、私はすぐには板倉先生とその提案を受け入れられなかった。  
その経緯をお話したい。

思えば長い長い仮説実験授業への道のりの始まりだった。  
わたしが教職についたのは1959年、学生時代は物理研究室にいたせいもあり、なんとなく理科教育に興味を抱いていた。勤めて間もなく『理科教室』(科学教育研究協議会・発行)という雑誌を読み出した。他の教育雑誌に比べて、理科の教育内容について役に立ちそうな教材論や授業実践が多く書かれていた。当時(今も健在)、科学教育研究協議会は民間の教育研究団体の一つで、「国民の教育」「教育の現代化」などを主張していた。板倉聖宣先生も入っておられた。

時は1963年の夏である。科学教育研究協議会が第10回全国研究大会を東京・厚生年金会館で開かれたので、わたしも興味本位で初めて参加した。まだ教師になり立てだったので、参加するだけで十分だった。

確か、物理分科会だったと思う。早口で提案する一人の男性がいた。

演題は「〈ふりこ振動〉『仮説・実験授業』のためのテキスト」(題名は後の記録を見て思い出した)だった。後日その記録(『理科教室』11月号)を見て思い出した。あの夏の大会での発表者が板倉聖宣先生だったのか。

「子どもに仮説を立てさせる授業なんてこちらでもやってるわい」

「なにか形式が目につくな」

と当初は聞く耳を持っていなかった私がいた。

会場では、板倉さんに対してたくさんの質問が出された。科学教育研究協議会の会員は中・高校の教員が多く

「教育の現代化にはどんな教材がいいのか」

資料 1-②

研究資料  
『仮説実験授業』  
1963年(井藤伸也編)

に議論の多くは注がれていた。仮説実験授業に対する反論もあったと思う。

しかし私は、11月号「〈ふりこ振動〉『仮説・実験授業』のためのテキスト」を読んで  
気になり始めた。

「〈ふりこ振動〉といいながら音叉や電波の振動にまで広げて振動全般を扱っている」「よ  
り原理原則を大切にしている」

さらに次のように書かれていた。

「はじめは子どもの多くは予想が外れるが、討論していくといろんな意見も出てくる」「子  
どもたちが授業に興味を持たざるをえないようにしくまれている」

これを読んで

「仮説実験授業は、何か面白いことを提案しているな」「知識をただ与えるのではなく、子  
どもの予想・討論・実験の過程を大切にしているな」

と思い始めた。

「ひょっとして、仮説実験授業は内容もすばらしいが教育の過程も大切にした授業運営法  
ではないか」と気になり出した。

ちょうど私は数年前から当時名古屋大学の上田薫氏の考え＝「知識をただ子どもに与える  
だけではなく、子どもの生活実態を交えて知識を習得させていく授業」に傾倒していた。こ  
れは、子どもの経験を大切にしながら、知識の系統を大切にしていくという矛盾した考え  
で、ある意味「経験主義」と「系統主義」とが拮抗した考え方であった。

その考えで「理科室も子どもに自由に開放」して、「実験(仮説実験授業という実験では  
ない)を計画」させ、「何をどう実験するか」も子どもたちに考えさせたりしていた。

しかし、なかなか授業は理想通りにはいかなかった。どうしても一部の子どものみ活躍する場  
となっていた。

この後、板倉先生の本を読んでいくにつれて、いくつもの疑問がわいてきた。

「それにしても、最初から〈問題〉がすでに決まっていたり、〈予想〉の選択肢もすでに決  
められているなんて授業の固定化ではないか」

「子どもの考えはどこで生かされているのか」

などと疑問が次々とわいてきた。

資料 1-③

研究資料  
『仮説実験授業  
1963年』(井原伸太郎編)

これはもうずっと科学教育研究協議会の大会に行って板倉先生の話聞くしかないと思っ  
た。

科教の大会では「仮説実験授業」という分科会があった。そこで、翌年から数年にわ  
たって板倉グループ(庄司和晃さん、上廻昭さんなど成城グループ)の提案に耳を傾け、私の  
疑問をぶつけていった。

最後に板倉さんに次のように言われた。

「あなたは理想を追いすぎている」

後に庄司和晃さんにも

「授業は科学なのだから形式は大切。あなたも柔軟に考えては」

「今度うちで授業を公開するのであなたも見に来られたら」

と言われた。

これはもう生の授業を見るしかないと思って、秋の成城学園の発表会に臨んだ。

驚いた。子どもたちが喜々として予想を立て実験の結果には立ち上り両手を挙げて喜んで  
いる。こんな授業風景は今まで見たことがない。子どもが授業に熱中している。わたしもや  
りたいと思った。

これ以来、『ばねと力』を筆頭に、仮説実験授業をやり出した(記録は『はじめての仮説  
実験授業(国土社,1974)』に収録)。他に「溶解」「結晶」「振り子と振動」などたくさんの  
授業を試みていった。

1963年の夏は忘れない。かけがえのない1日となった。

2022.08.23

資料2-①

『仮説実験授業研究会ニュース』 2022年11月

報告／板倉科学史・科学教育研究会 今回も ZOOM で実施

第5回 平林浩さんの

## 「仮説実験授業60周年、いまだ未来の科学教育、

(続) 『ひと』とたのしい授業も含めて」

主催／多久和俊明・渡辺規夫・加藤浩幸

10月15日(土)に表記の研究会をオンラインで開きました。参加者は15人。当日のレジュメと感想を紹介します。とても心に残るいい講演会、いや研究会だったと思います。

### 講演のレジュメから

かなり直観的に、つぎのような視点でわたしの経験や思いをしゃべってみようと思います。順番はおよそこの通りにしたいと思いますが、突然変わってしまうかも知れません。

- 1 「楽しい」と「感動」と、実際の授業書づくりを通して
  - ・ 〈まかぬたねははえぬ〉
  - ・ 《燃焼》
  - ・ 《もしも原子が見えたなら》
- 2 「生活教育」「問題解決学習」と仮説実験授業
- 3 遠山啓と板倉聖宣の「楽しい」論争 根本的にちがいがいいのか
- 4 教育の内容に教師が責任をもつ、あるいは、ひとびとが責任をもつ  
仮説実験授業はそこに立っている、『ひと』の教育運動も、

### 感想文から

感想文は早くいただいたものの一部を紹介します(紙面の都合でカットさせていただきました)。岩本美枝さん/4時間があったという間に感じられました。1945年の8月に日本人の価値観が大きく変わりました。当時の教員も戸惑ったことでしょう。小学生だった私も

## 資料 2 - ②

不思議に思いながら言われるがまま教科書に墨を塗りました。そんな遠い日を思い出させていただきました。60年代から80年代にかけての仮説実験授業の授業作りの話を通して「感動する」「楽しさ」を根底にする事の大切さがよくわかりました。平林先生のお話を伺いながら、自分の青春の日々が重なって、蘇ってくるようでした。八王子セミナーハウスでの「ひと塾」に参加していた日のことも懐かしく思い出されました。この頃は未来の科学教育を夢みておりました。60年経った今、あの時の理想はどれくらい達成出来たのだろうかと自分に問いかけてみる、そんな時間になりました。楽しかったです。

佐藤重範さん／昨日は、子どもの送り迎えでドタバタしました。また、かなり体調不良で意識が飛びながらで失礼しました。文字起こしができればうれしいです。その中でも、「仮説実験授業でのたのしいは、感動的にわかる」という言葉がとてもよかったです。知ってはいましたが、何か大事な言葉のように感じました。今回の一番の収穫です。〈まかぬたねははえぬ〉は、とても好きな授業書です。完成するといいなあと思うしていました。パスツールの話などがはいるといいのでしょうか。高校生の時に『失敗の科学史』を読んで感動しました。

黒田礼子さん／平林先生のお話をたっぷり伺う事が出来てとても幸せでした。日生連の全国大会に板倉さんが3回も参加していた事は、和光にいて火曜研究会に参加されていた平林先生を通じて日生連の人達に期待するところが大きかったのではないかと思います。もちろんその原点に平林先生に対する期待があつたに違いありません。雑誌「ひと」やひと塾に関わる板倉さん・遠山啓さんたちを平林先生のお立場からご覧になった興味深いお話は、平林先生のお人柄がよく分かるような気がしました（多忙な事務局のお仕事をされながらも渦中に巻き込まれない冷静さ？）私は今回は特に先生の授業書の問題構成等に対する強い思いに、今更ながら是非〈まかぬ種・・・〉を完成させていただきたい気持ちになりました。そして自分が退職してから純粹に科学を楽しむために参加している平林先生の出前科学サークルの事です。平林先生の出前教師としての長い体験は先生ご自身にしか語れないし、記録出来ないとても貴重なものだと思います。もし次回があれば、平林先生のご都合を充分考えていただいて「科学の出前教師」としてのお話を伺いたいと思います。

## 資料2-③

実藤清子さん／平林さんのおっしゃったことで、仮説実験授業は最初の第1問でそれが何を狙いとしているかがわかる。たとえば《ものとその重さ》で体重計に乗る問題がそうだ。今日はこの言葉が印象に残りました。それと「墨ぬり教科書」を見て、本当にあったことだ。そして、別の参加者の塗っていない教科書が示され、何が書いてあったかたどるなど、ZOOMならではのことでした。おもしろかったです。遠山さんの〈楽しい〉は〈楽しい学校〉ということで、「世界史のなかにどう位置づいているか」という板倉さんの問とは違うと思いました。

吉岡有文さん／吉岡が学んだことを吉岡的な言葉で表現します。吉岡は、科学を学ぶことは、科学すること（科学実践）だと確信しています。実は、『科学実践としての理科教育』というのが吉岡の博士論文です。ということで、以下のような感想をもちました。／①科学教育における「楽しい」は、授業が楽しいということではなく、実際に科学すること（科学実践）により、科学の面白さに「感動」することだと、吉岡が確信をもてたこと。『小学国語讀本 尋常科用』を使った国語の授業で、「僕の望遠鏡」を読んで、板倉さんが「楽しい」と感じたのは、授業そのものではなく、望遠鏡の面白さ（科学、科学技術の成果）に対する強い興味なのだと思います。②板倉さんが、すみぬり教科書の経験を通して、教育に対するある種の怒りを覚え、それが科学教育の問い直しになったということは、吉岡はどこかで読んだ記憶があります。そのことが、吉岡の手に入れた教科書『初等科理科 二』において、実際にすみぬりを発見し、実感をもって理解できたこと。本日、所蔵している他の教科書を調べました。すると教科書『高等科理科 一』において、18箇所もすみぬりを発見しました。これには驚きました。この教科書で学んだ生徒は、板倉さんと同様の思いをもったかもしれません。なお、すみぬり教科書については、DVD『NHK 特集 日本の戦後 第6回 くにあゆみ 戦後教育の幕あき』で見ることができます。③平林さんは、自然観察の授業実践をされていると思いました。考えてみると、自然観察は科学実践ですね。吉岡は、日本自然保護協会の自然観察指導員の勉強をしましたが、最近は全く野外に出ていません。／平林さん、多久和さん、まさに「平林先生とみなさんが一緒にこの講演会を作り上げている」という会でした。他の参加者のみなさま、ありがとうございました。

## 資料 2-④

渡辺規夫さん／ちょうど来客があり、出たり入ったりしていて、かなり聞き洩らしました。残念なことをしました。富山の立山での研究会のこと、当時は日本生活教育連盟で発表したこと、遠山啓の「たのしい」と板倉聖宣の「たのしい」は違うということがわかってよかったです。当時、数学の授業に楽しさを取り入れるということが議論されているときに、仙波さん（故人、数教協と仮説の両方の会員）が「楽しい授業に数学を取り入れる」と主張しました。『ひと』の発行は確か1973年3月ごろ、私が教員になったのは1973年の4月、私の教員生活と重なっています。『ひと』という雑誌による教育運動はあるところまでうまくいったけれども、うまく行かなくなりました。社会科で信玄堤の授業などなかなかおもしろかったのですが、その授業を受け継いで発展させるという研究がなかったのはなぜかという疑問が生まれました。まとめませんが平林さんの話が聞いてよかったです。

池上隆治さん／平林浩さんの講演会ありがとうございました。板倉さんが仮説の第1回全国合宿研究会（有馬，1968年）前に3年連続で日本生活教育研究大会に参加して話をしていることを今まで注目してこなかったが、今回そのことを知って、板倉さんの生活単元学習への好意的評価が分かるような気がしました。当時は、戦争の反省から出発して、どんな教育をしなければならないか—から考え出していこうとする時代の熱気がすごかったんだろうなあと思います。

### 今後の講演会のテーマについて、みなさまからの希望／

- ・出前教師について（平林さんから、これは一回分以上の話になるということです）。
- ・出前教師と学校教育と板倉聖宣／関連があれば聞きたい。
- ・平林さんが話したいことを話ししていただければよい。

### まとめ／

今回ほど平林さんの言葉に考えさせられたことはありません。「今教えていることはこれでいいのか」「やっていることが世界史にどう位置づけられているのか」「仮説実験授業が今後伝えられていくために、授業に責任をもって、研究し、実践を」「ユニークな子どもをつくる方がミサイルをつくるより大事である」などなど、じっくりと平林さんの未来への願いを話していただいたと思います。



『子どもの変革と仮説実験授業』(西川淳司)  
(1968年初版・板倉聖宜編・明治図書)

I 授業の民主的運営と民主教育 — 仮説実験授業の発展 —

びては仕事はできません。だから、大きな失敗はしたくはありませんし、大きな事故も起こしたくはありません。正直にいて、人様の声も気にかかります。

しかし、仮説実験授業をやったり、仮説実験授業について何かを考えたりすることは、私にとってはとても楽しいことなのです。あまり人のやっていないことをして人様から何かいわれはしないかと気になりながらも、楽しくておもしろくてやめられないのです。現在では、大げさかもしれませんが、仮説実験授業は私の生きがいの一つになっています。それには、いろいろな理由があるのですが、その最大のものは、次の事柄ではないかと思っています。

私は、仮説実験授業から、子どもが歓迎する授業の方法を学んだというだけではないのです。仮説実験授業をなりたいと考えている論理 — 思想を学び身につけることができました。(これからも、その思想を深め発展させなければと思っています) そのことにより、いつのまにか身につけた、うまくいい逃れる処世術を自分から追い出すことができそうに思えてきたのです。そして、そんな身構える姿勢を早く追い出して、すなおに自己を表現することができるようになれば、もう、とっくの昔に、みきりをつけたはずの能力も伸ばすことができ、自分を発展させることができるのではないかと、おぼろげながらも希望が持てるようになったのです。

## §2 明星の授業と成城の授業

私が仮説実験授業を知った最初のもは、『理科教室』1963年11月号に掲載された、板倉さんの「仮説実験授業のためのテキスト〈ふりこと振動〉」という論文でした。あるいは共感しながら、あるいは新しい論理に心を奪われながら読みひたり

資料 3-①

## I 授業の民主的運営と民主教育

ました。今までにないまったく新しい世界が開けてきたように思われたのです。

それまでも、教育図書を読んで感動もしましたし、また、ひどく興奮した経験もあります。しかし、そういう場合でも、胸がときどきしたり、頭の中に血がのぼってやたらに「カアッ」とした記憶だけが残っていて、新しい授業の具体的なイメージはあまり湧いてはきませんでした。だから、本や論文を読んでもやたらと意識過剰になるだけで、私自身の授業の改善にはあまり役立たなかったようです。そのため私自身は一層深刻になっていったのです。でも、この「ふりこと振動」には、新しい論理と共に、毎時間の具体的な授業案がテキストという形で示されているのです。——現在はテキストと呼ばないで授業書と呼んでいます。——しかも、そのテキストを使えば、テキスト作りに参加していない者にも授業ができるというのですから、目の前が明るくなったように感じたのも、当然のことだと思います。そうはいっても、私は当時四年生を担当していたこともあって、この「ふりこと振動」を、自分もやれる授業だという身近なものとしてとらえていませんでした。

それから三ヶ月たって「仮説実験授業のためのテキスト — 〈ばねと力〉」が『理科教室』に発表されました。

「問題」は原則として、問題 — 予想 — 討論 — 実験の四つの段階からなっています。このことの中には、問題の答えは実験がきめるので教師がきめるのではないという思想がこめられているのです。……

実験をやってから、教師はこの実験の結果から何がわかったかを長々としゃべってはいけません。……予想をたててしっかり討論しておけば、実験の結果、何がわかったかということは、ほとんど言わなくても明らかなのです。……予想

『子どもの変革と仮説実験授業』<sup>（改訂）</sup>  
（1968年初版・板倉聖宣編・明治図書）

I 授業の民主的運営と民主教育 — 仮説実験授業の思い出

や討論をロクにせず実験から何がわかったかということばかりに力を入れるのは解釈主義であり、先生の権威でもって結論をおしつけることに他なりません。……

実験のあとにくるものは、実験の結果、予想と討論のときだされたどの予想、どのような考えが正しいことがわかったのか、ということをはっきり確認させるだけでよいのです。いや、それ以上のことをやってはいけません。実験の結果、何か気づいたことや一般化して考えたいことがあったら、それをたしかにするために、もう一度予想を新たにしていし問題を取りあげて実験すべきなのです。

特にこの部分は印象的でした。これまでの自分の授業といえは、板倉さんのいわれる「オツケ学習」であったわけですが、自分が何とかして、少しでもよい授業をしようとして力みすぎ意識過剰になった時ほど、ひどい「オツケ」をしているように思えました。そう思った時の虚しい気持は今でもわすれられません。

このようなショックを受けながら、当時はまだ、仮説実験授業を自分の身近なものとして、とらえることができませんでした。依然として、同じような「オツケ学習」を続けていたのです。仮説実験授業は、まだ観念のなかのものに過ぎなかったようです。今でも時々、「仮説実験授業は、確かにすばらしい授業だと思いますが、全体の系統も確立されていないし、なかなか仮説実験授業にはふみ切れません」という言葉を聞きますが、以前の私を振り返って、何となくその人たちの気持ちは理解できるように思います。しかし、やがて仮説実験授業を自分の身近なものとして、考えることができるようになりました。

一つは、従来どおりの授業をすれば「オツケ学習」にならざるを得ないだろうと思いつつも、その方法から抜け切れない

資料 3-②

I 授業の民主的運営と民主教育

いという悩みの蓄積によるものです。

二つめは、「オツケ授業」から早く脱出して、子どもたちの主体性を尊重し確立しなければならないという強い気持がありました。

三つめは、1964年夏の日本生活教育連盟の研究集会で「ものとその重さ」の授業書を実際に手にしたことによって、授業のイメージがかなり具体的に描けるようになったことです。

四つめは、力学の分野では「ものとその重さ」・「ばねと力」の授業書もできており、教材の系統についても、私自身ある程度の見通しをもつことができたことです。

五つめは、仮説実験授業の提唱のグループのあり方及び研究方法が信用できそうだったということです。

もちろん、この五つのことを考えるうえで、その前提になる「科学上の一般的な基礎概念を教え科学的な筋道のたった考え方を教えようとする真の科学教育」をめざそうとする気持が強くなったわけでは、そういって、1964年の夏「ものとその重さ」からやってみようと、かなり強い決心をしたのです。

それでも、最初のこととなると、いろいろ心配なことがありました。まず何といっても、その教材を自分で選択したという責任感からくる不安感といえますか——隣の学級のやっていない教材をやるという、人と違うことをやるという不安、教科書の教材でないものを取り上げるという不安、自分がやって本当にうまくいくかという不安、そういった気持が交錯して、他人にもなぜ「ものとその重さ」をやるのか説明できるような材料をもっていなければと思ひ、「重さ」についての調査もしてみました。（この調査は、自分自身の疑問をはっきりさせるためにもやったのですが）それに、実際の授業も参観してみたいと思ひました。ちょうどその年の秋、成城学園で仮説実験授

『子どもの変革と仮説実験授業』(1968年初版、板倉聖宣編・明治図書)

I 授業の民主的運営と民主教育 — 仮説実験授業の発展 —

業の公開研究会が行なわれたのでさっそく参加しました。それから約一ヵ月後に明星学園の研究会もありました。もし、明星学園の授業より仮説実験授業の方が劣っていれば、「ものとその重さ」の授業計画を変更しなければならないと思い、両者を比較するため、それにも参加しました。

この二つの研究会について、非常に印象深く、私の記憶に残っていることがあります。明星学園では、たしか『ぼくらは科学者』という本を中心にして授業が進められていたようでした。また授業過程は、日頃私が行なっている授業とほとんど同じ形で進められているようでした。しかし、こんな授業はどうい自分の力で考えられそうもないし、まねすらできそうもないと思えました。それにひきかえ、成城学園での仮説実験授業は、日頃の私の授業とはまったくちがった授業過程ではありましたが、授業書さえあれば私にもできそうだと思います。また、別のいい方をすれば、明星学園の授業は、教師が主人公で君子のように存在し、たいへんすました授業だと思いました。仮説実験授業の方は、子どもが主人公だという印象が強く、たいへんおもしろい授業だと思いました。

子どもたちの授業にとりくんでいる態度にも、かなり大きな違いがあるように思いました。明星学園の場合は、こうなるのが当然だというような、平然とした表情で勉強しているのです。授業内容は、程度の高いものだったのにもかかわらず、こともなげな顔をしているのです。成城学園では、二つの授業を参観したのですが、子どもたちがたいへん活発で、しかも気らしくに発言しているように思いました。しかし一面、何となく動揺しているようにも思えました。また疑い深い子ども、どんよくな子どもが多いようにも思えました。この授業中の子どもの態度については、漠然とした感想にすぎませんが、これについ

資料 3-③

## I 授業の民主的運営と民主教育

ては、仮説実験授業を実施してみて、なるほどと納得がいったように思っています。

このように、一ヵ月という比較的短い期間に二つの研究会が開かれ、両者を比較できたことは、私にとってとても幸いなことでした。明星学園の研究会においても旅費に見合うだけの感動はもって帰ったつもりですが、「仮説実験授業なら自分にもできそうだ」という実感をたいせつにすることにしました。

それからすぐに、子どもに手わたす授業書の原紙を切り始め、三学期にはいってから授業を始めましたが、この「ものとその重さ」の授業は、私にとってとても意義深いものになりました。ちょっと大げさかもしれませんが、私の生きていく姿勢を変える大きな力になったのです。それまでは、授業というものは、子どもの人生観には、何らかの影響を与えるものであるという漠然とした考えはもっていましたが、教師の人生観や生活態度を変えていくものであるなどとは、あまり考えてはいませんでした。授業をとおして教師も変革される、これは私にとっては、予想外の出来事でした。この授業によって実践というものの本当の意味を体得したのではないかと思います。

この授業が新しい自己発見の転機になったということとともに、忘れられないのがN君のことです。

## 2 ものいわぬN君を動かした授業

### §1 N君のこと

私が、N君の担任となったのは1964年の4月、彼が5年生になったときのことでした。彼は、一見無口でおとなしい子どものように見えました。そして、友だちとほとんど遊ばず、好んでひとりになりたがるように見受けられました。

貧しくても最高学府を目指せ！

世界を変える情熱を描く奇跡の実話

親ガチャなんて関係ない！

# スパロボ

アーナンド先生の教室

リテイク・ローシャン ムルナール・タークル アーティテイヤ・シュリーワースタウ  
監督: ヴィカーズ・バハル  
配給: SPACEBOX 互臣シネマリッジ

© Bollywood Entertainment, © HRX Films, © Nishakanta Entertainment, © Pratham Films

★ 人の可能性が活用された好例だ  
\*\*\*\*\* TIME 誌

★ 世界で最も革新的な教育のひとつだ  
\*\*\*\*\* Newsweek 誌

★ インドで最も優れた教育機関だ  
\*\*\*\*\* オバマ元米大統領

★ 世界中に届けるべき素晴らしい構想だ  
\*\*\*\*\* Discovery Channel



# 王の子供は王じゃない。王になるのは能力ある者だ

全世界が絶賛した教育プログラム〈スーパー30〉  
その誕生に情熱を捧げた1人の男と30人の生徒の奇跡の実話

2003年、インドの片田舎で始まった教育プログラムが全世界の賞賛を浴びた。天才的な数学の才能を持ちながら、貧しい生まれのためケンブリッジ大学への留学を諦めたアーナンド・クマールが始めた私塾:スーパー30(サーティ)。極貧にあえぐ家庭から優秀な子供30人を選抜して、無償で食事と寮と教育を与えるというこのプログラムは、開始した年から、世界三大難関の一つと言われる、インド最高峰の理系大学"IIT(インド工科大学)"へ塾生を送り込むという快挙を成し遂げた。その後も毎年20人前後が合格。2008年から3年にわたって30人全員を合格させて、いまなお続いているこのプロジェクトに、世界中のマスコミが注目して絶賛の声が寄せられたのだ。

本作は、この奇跡の実話に基づき、貧困に夢を奪われながらも、世界を変えようと奮闘する1人の男の情熱と、劣悪な環境でも諦めない30人の生徒たちの学ぶことへの喜びをエンタテイメント性豊かに描きながら、インドのみならず万国共通の学ぶ権利の本質、身分や格差社会の問題を浮き彫りにしていく。運営資金が底をつき、空腹に苦しみ、ライバル校の妨害や、マフィアの襲撃を受けながらも、型破りな授業を続けるアーナンドと30人の生徒たち。能力はあっても、劣等感を持つ生徒に「王の子供は王じゃない。王になるのは能力ある者だ」と語り、自信を持たせ、寄り添いながら夢を実現しようとするアーナンドの姿は、あなたに世界を変える希望を与えてくれるだろう。



出演:リテック・ローション ムルナルタークル アーティティヤ・シュリーワースタウ パンカジトリバーティ 監督:ウィカース・バハル 配給:SPACEBOX 宣伝:シネブリッジ  
原題:SUPER30/2019年/インド/ヒンディー語/シネスコ/154分 © Reliance Entertainment © HRX Films © Nadladwala Grandson Entertainment © Phantom Films.

spaceboxjapan.jp/super30  
@super30\_jp

👍  
アーナンド先生の  
破天荒教育術

日常の全てに  
疑問を持って!

金が無いなら  
工夫しろ!



雷はなぜ鳴る?  
扇風機はどうやって回る?  
常に疑問を持って  
問題は自分で作れ!

英語コンプレックスを  
克服せよ!

恥をかくことは怖くない!  
街の真ん中で英語劇に挑戦



手作りプロジェクターで  
高い参考書1冊をみんなで勉強

10.22  
ROADSHOW